

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



2004年 6月号 / 250円

編集部より

安楽への執着

こわれた壺「秘められた宝庫」

ドゥア（祈り）のある毎日へ

ズイクル（唱念）

忍耐とは、災難の最初の衝撃をうけた時にあるものである「第1回

親の特に父親の権力

預言者ムハンマドを語る 「預言者たちの風格」第3回

リサーレイヌール 「人間と世界の本質（第2回）」

画面から考える：『パッション』The Passion of the Christ

創造の生きがい 4つの創造第3回

レシピコーナー 「白チーズの焼き菓子」

「夏の服装」

心のうた 「迂闊さという眠りの中でよこたわり目覚めずに」

詳しく学んでみましょう 『礼拝（サラート）第5回』

「アフ・バクルに対する国庫からの日給」

「ムハンマド」 by 小杉泰 を読んで 第2回

2

3

4

7

8

11

12

13

15

17

19

23

24

25

26

27

28



今年も梅雨のない北海道を除き、日本全国で梅雨入りしました。屋外の緑がますます深みを増し、雨にそぼ濡れた青や紫色のアジサイがあちこちで彩を添えます。外出が億劫になる、湿気がうっとうしい、体調が優れないなど、それまでの爽やかな季節から一転してマイナス面も前面に出てきがちですが、梅雨時に雨量が少ないと夏の水不足が問題になるなど、この季節に十分な雨の恵みを受けることによって私たちは豊かな水資源を享受することができているのです。

先日あるテレビ番組で、日本の「水」を巡る様々な話題が取り上げられていました。その中で危機感をもって訴えかけてきたのが、日本は水資源が豊富な国だと誰もが信じて疑わないが実は世界最大の水輸入国である、という点です。一瞬、ミネラルウォーターの輸入量がそこまで増加しているのかと勘違いしましたが事態はさらに深刻でした。

食料自給率の低い日本では農畜産物の多くを輸入に頼っていますが、そのためそれらの収穫・飼育に必要とされる大量の水を日本は海外でまかなう結果となっているそうです。私たちはその水を間接的に消費しているもの実際には目に見えないことから「仮想水（バーチャルウォーター）」と呼ばれており、その総輸入量は約 600 億 m<sup>3</sup>/年にも達し、日本国内での総水資源使用量約 900 億 m<sup>3</sup>/年の 3 分の 2 程度の水を、日本は海外に依存しているという研究結果も出ています<sup>1</sup>。一方で輸出元の産地では大量生産に追いつくため水資源が濫用され、急激な枯渇の危機に直面している所もあるのです。

私たちにはアッラーから与えられたあらゆる恵みに感謝し、適切に使用する責任が課せられています。自らを振り返るとき、たとえば食料ならば食べ残しはしないとか賞味期限内に食べきるなどの努力を意識的に行っていても、水はどうでしょう。飲食のほか、トイレや風呂、洗濯などの生活用水にふんだんに用いられていますが、気軽に蛇口をひねった後の使用量や排水の行方、必要性までどの程度気を配っているでしょうか。

今年の梅雨は雨量が多いと予測されているそうですが、世界各地の現状が見えないところで私たちにも直結していることや身の回りでの使用方法など、この季節、水にまつわる諸問題に考えを巡らす良い機会ではないかと思えます。

\* イラストレーターの方より表紙絵について：今月は表紙絵を「アラーフは雨を一滴一滴天使たちによって送っています...」を元にして描きました。

<sup>1</sup> 東京大学生産技術研究所記者会見「世界の水危機、日本の水問題」 沖 大幹 2002 年 7 月 18 日(2003 年 1 月 31 日、2003 年 7 月修正版) <http://hydro.iis.u-tokyo.ac.jp/Info/Press200207#VW>



いかなる崇高な大義や真理も、それを信奉する者たちが確固たる意志をもって保持し献身することによって、不変性や普遍的地位といったものを獲得していきます。しかし信奉者が理解不足であったり教えに忠実でなかったり辛抱強さに欠けている場合、その大義や真理は、敵意に満ちた画策を図る敵対者によって徐々に人々の記憶から消し去られていってしまいます。

よどんだ水が悪臭を放ち、流動性を失って腐敗するように、安楽や気楽さに身を任せる怠惰な人々も、墮落し敗北者となっていくことは避けられません。安楽さに浸りたいという欲望は死に一步踏み出したことへの警鐘であり徴候であります。しかし感性が麻痺した者はその警鐘を耳にし徴候を理解することもできませんし、友人からの警告やアドバイスに留意することもしません。

怠惰と安楽への執着は貧困と屈辱を招く主要因のひとつでもあります。ものぐさで安楽にかまけている受身的な人々は、気付いたときにはあまりに低いレベルに墮落し、基本的な必需品に至るまで他人の世話を受けなければならないことになるでしょう。

ものぐさや安楽に加え、ひとたび家でくつろぐことに極端なまでの愛着を覚えると、人は「前線」を放棄し臆病へと転じます。この低迷状態を見逃し、賢明かつ適切に対処しなければ、本来あるべき姿からの逸脱や忌まわしい結果が待っていることでしょう。

家庭での安楽、女性と過ごすことの虜となったがために「前線」を退く人々は、期待と正反対のものに遭遇しがちです。そして素晴らしい家庭や可愛い子供さえ失う可能性もあります。ある逸話の中で、家のことを心配するあまり義務を果たさず勇敢に戦わなかった司令官である息子を非難した母親が出てきます。「お前は戦場で男らしく戦わなかった。せめて座って女のように泣くぐらいのことはしなさい」この母親の言葉は己の役割を果

たすことの大切さを正しく示唆しているのではないのでしょうか。

人間にとって、変化や崩壊はたいていゆっくりと静かにやってきます。時にちょっとした無頓着さや、「隊商」からほんの少しはぐれたことが、完全な崩壊や丸損を招くこともあります。にもかかわらず、転落した人々は同じ状態の同じ線上にいると錯覚するため、モスクのミナレット（尖塔）のような高い頂上から深い井戸の底に急落したことを認識していないのです。

骨の折れる仕事を離れた後、罪の意識にかられるようになる人もいます。もっとも誰でもやるべきことから逃避し怠けた人はそのように感じるはずですが、そのような人々は自分自身を守ろうとして、任務に従事し続けている他の仲間を非難し始めることがあります。彼らが逸脱したことから逃げ切ることや元の状態に戻ることは到底不可能です。預言者アダム（彼に平安あれ）はたった一つの行いによって以前の地位を回復することができました。それはすなわち、無意識のうちに罪に陥った後、自分自身の過ちを告白したことでした。対照的にシャイターンは、重大な罪を犯したにもかかわらず自分自身の守りに努めたことで永遠の挫折に陥る羽目となったのです。

一部の人が決意や意志の力、努力といったものを失うと、周囲の人々の勇気や信心を深めようとする力にも影響が及びます。優柔不断な個人が示すほんの一瞬のためらいや乗り気のなさが、百人の人間の死にも相当するショックや失望を引き起こすことさえありうるのです。このような惨事は敵を勇気付け、私たちを攻撃する隙を与えるのが落ちです。

子供や家族、この世的な財産といったものの魅力は強力に人を引きつける厄介な試練です。この試練という裁判で勝訴する被告とは、断固たる毅然とした強い意志を持つ人々です。そして朝な夕なに、自身を捧げた真理に寄り添う誓いを心の底から新たにすることのできる幸運な人々なのです。



## 2 秘められた宝庫

普遍的真理を人は認識できるでしょうか？

人には見、知り、聞くべき事がたくさんありますが、その中でも一番大切な事は確かな真実、絶対的真理でしょう。真実や普遍的真理又はそれに及ばずともそれらに近い事柄を人は見たり、知ったり、感じたり、発見したりする事が可能ですが、これらを妨げる障害となるものもたくさんあります。

表現を変えて申し上げるなら、人間は潜在能力として真理を感知する力を持つと同時に、その本来の力とは逆の力がこれを阻止しようとするわけですね。たとえば人間の内外で行われる、シャイターン（悪魔）や悪魔的な考えを象徴する者達との戦い。又は、自我と超自我の対立。自我の欲望と良心の葛藤など・・・しかしながら、預言者（彼に平安あれ、以下 S）は真実に到達するために、これらの障害を乗り越えられました。彼が彼の名において、「我が自我は、我に降参いたした。」とおっしゃられることにより、良心の勝利を示されました。そして私たちに自我が屈服したことを思い出させていますが、私達にとってこのようになることは、それほど簡単な事ではありません。

私たちの自我と預言者（S）の自我の間に違いがありますか？

はい、おそらくあります。彼に特有の自我とは、常に清らかであり、完全に純粋で清浄であられました。これは、彼にのみ相応しく、彼のみに見られる特質です。又このようにも解釈可能でしょう、恐らく彼の自我は自我という特質をすべて包み持っていました。それらは、預言者（S）の強靱な意志の力に耐えられなかったのだらうと思います。ゾロアスター教<sup>3</sup>、バラモン教<sup>4</sup>、ヘルメス<sup>5</sup>思想でみられる二元論、汎神論、多神の概念を承認なさらないのなら、そこに真実はおのずと現われてまいります。それについて少し説明いたしましょう。まず、シャイターンのような側面と天使のような側面を備えて、人間は存在いたします。「人間に常に悪を命じる自我」は、人間の内面において、シャイターンの手先として働きます。

<sup>2</sup>昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがおりました。懺れたついで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がおりました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったので、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。（HPからの転載）

<sup>3</sup> [Zoroaster] 紀元前六世紀頃のペルシャの予言者ゾロアスター（ツァラツトラ）が始めた宗教。ペルシャの民族宗教を二元論で体系化したもの。光の神・善神アフラマズダと、暗黒の神・悪神アーリマン（アングラマイニユ）の確執から一切を説明し、ついに悪神は敗れて暗黒の中に追放されるとする。

<sup>4</sup> [Brahmanism] おいてバラモン階級を中心に形成され発展した民族宗教。ヴェーダを根本聖典とする。司祭階級バラモンを尊ぶ。梵我一如（ぼんがいちにょ）とウパニシャッド哲学に基づき、「ブラーフマン（梵）」と呼ばれる神から与えられた不滅の原理を最高のものとする。汎神論的傾向をもつが、各儀式ごとにその崇拜の対象となる神を最高神の位置に置く。このため一神教・多神教に対して交替神教と呼ばれる

<sup>5</sup> [Hermeticism] 神人ヘルメス・トリスメギストスに帰せられる秘教的思想伝統。紀元前後5～6世紀のあいだにエジプトでピュタゴラス主義、プラトン主義、ストア主義、密儀宗教、グノーシス主義、占星術、錬金術などを摂取・統合して成立したと見られる。史料の総称が「ヘルメス文書」。生気論・化生論的世界観、ミクロコスモス＝マクロコスモスの照応説、天体の作用力とその操作可能性の主張などに特色がある。ヘルメスはオリンポス12神の1人。ギリシャ神話の中では他の神々も記されている。

人が「人間に常に悪を命じる自我」としてすごす時には、内面的には、シャイターンのためにスパイする存在となるわけです。絶え間なくその指図に従い行動しよういたします、そしてそれから救われる瞬間までシャイターンのいかに自分自身に近いかということには気づきません。シャイターンの近い時には（アッラーは人の頸動脈よりも、その人に近いのですが）実は、彼はアッラーから遠ざかっているのです。

この危機的情況を乗り越える事は可能でしょうか。

これは困難な危い状況ですが、この危機を乗り越えることはできます、唯一以下の条件を満たすならば・・・その条件とは「真剣に精神を育むという意味で継続的に精神を鍛錬し、アッラーの御前で自分自身の無力さと弱さを心から感じ、無心で彼のみに向かう覚悟をもつこと」です。さもないと、アッラーからいつも人は遠い存在となります。前に申し上げたように、アッラーは頸動脈よりも人間に近いわけですが、アッラーに向かおうとなさらない方々は、アッラーからはるか遠くに位置するのです。なぜならクルアーンにも記されているように、シャイターンの人間にとって離れ難い友となるからです。「慈悲深き御方の訓戒に目を瞑る者には、われはシャイターンのふり当てる。それは、かれにとり離れ難い友となろう。（クルアーン 43/36）」ですから人間は自分自身を主から遠ざける事柄と主に近づける事柄をよく知るべきです。本来、人間とはその特質に従い、主への純粋な感覚を磨くなら、「成長する存在」を代表する者といえます。このように人間を捉える方々は、人間を天使よりも優れているとみなします。なぜなら、人間は精神世界にも開かれた存在だからです。彼は「万有」という本の一部でもあり、そのひながたでもあり、さらに、その本の目次をも示しています。そのため、それを読み学ぶ者は、おおいなる万有の意味を解き明かすこととなります。つまり、万有という本を読み、その目次である人間というものをよく観察するならば、一瞬にして、大変厚いその本の中身に目を通したとことにもなるのです。そうですね、人間とはこのような特質を持つ存在です。しかし、同時に、万有という限られた世界に存するものではなく、それさえも超える存在であることを忘れてはなりません。そう、その実在は天使よりも高く、それら自身は秘められた存在であり、この世界がその存在に詰め込まれるほどおおきく、又、そこの世界を越す存在です。まるで、人間とは深遠な天や大地の意味や内容が、ぎっしり詰め込まれた一冊の本のようです。人間が綴られているそのものは、やがてそれ自体が人間として観られる（読まれる）ようになりました。

人間に示される特徴の中に、天使よりも優れている点があることはすでに申し上げました。

そうです、高貴な天使達の位置、またその中における距離感覚は私達が知っている物理的世界外に存在します。そこから物理的世界へ介入することもありますし、そこで物理世界とは逆の現象が起こりえます。そう、ちょうど鏡に映る世界を考えると想像しやすいかもしれませんが、それらはこの世界の外での出来事です。あなた方はそれらを、物理的法則にしたがって確証することも、価値付けることも、意味づけすることも、解き明かすことも、分析することさえできません。天使達のような目に見えない存在もちょうどこのような感じです。天使たちをはじめ幽玄界の存在は、私達には理解しにくいのですが、明らかにこれらアッラーの兵士達は、ある世界に存在します。その数は宇宙に存する原子の数ほどです。しかし人間はというと物理的世界で生きています。ですから必然的に物理世界に関係することになりますが、いろいろな方法で、この物理世界を超え、異次元の世界とも往来することが可能です。たとえば、「真理の

主の御名の世界」が存在します。その世界とこの宇宙つまり私達が住む物理的世界とはある種のつながりが保たれています。そして、意識を持つ存在の中で、この物理的世界とかかわりをもつのは唯一人間だけです。真の主の比類なきすばらしい属性や神の御名は本当に存在しますが、これらのうち私達の知りえるものは、実は、大変少ないのです。ハディースによると、これらの中には誰にも知らされることのない、ただ真の主のみが知り給う御名や属性もあります。ときには、ある人々は御名や属性の世界とつながりを保ち、誰もが知りえない真の主の御名や属性に到達することが可能です。このように人間が物理世界を超え、彼の世界に移るわけです。このことは御名と属性以外についても通用いたします。たとえば人が心の世界から「存在」を観て、そしてさらにそのかなたに「存在の真の世界」をも観るならば、そこで偉大な世界を見出します。すべての属性が真実であることを知るでしょう、そう見て、悟ります。そして秘密の境界線を通り抜けるのです。そして、はじめて、真の主をよく観ることができ、真の主とある種のやりとりが起こるわけです。これはアッラーの下さる賞賛のひとつでもありまた恵みでもあります。たとえば真の主は彼の尊厳により、人々の顔を光り輝かせ給う一方、アッラーはその尊厳により存在（被造物）と絆を結び給う時、全身全霊でアッラーを感じる彼ら（存在）は熱く燃え上がり、解けて、燃え尽き、灰となり、消滅します。残るのはただ彼（アッラー）のみ・・・このような段階まで到達した方々の一人であるムフィッディーン・イブン・アラビーは「ラー マウジュダ イッラーフ（彼のほか存在するものは無し）」とおっしゃっていますが、主体的によく観察すればまさにそのとおりでしょう。

「ラー マウジュダ イッラーフ」（彼のほか存在するものは無し）

ムフィッディーン・イブン・アラビーは「ラー イラーハ イッラーフ（彼のほかに神はなし）」は真理への道中で彼を求める者達のタウヒードであり、「ラー マウジュダ イッラーフ」は真の知に到達した者達の・・・とおっしゃられました。これはアッラーをどのように魂が感じ、アッラーを感じることにどのように喜びを味わうかについての微妙な感覚の問題です。よく観てみますと、彼がとどまっている場所と位置について、このように見、そして、感じたならば、彼は見たことや感じたことを、ありのまま語っていると申せます。自己矛盾のうちに生きることを彼は望まないからです。見たものや感じたものと違うことを語ることは、イブラーヒームのような誠実な方々にとってありえないことです。

アッラーを心で知りえるでしょうか？

潜在能力としてこの特質を持つ人間が、言葉を越えた段階があることを認識し、この世界をその中に入れることができるほど広大な良き心を手にいれることができるならば、その方はアッラーを宝物として心で感じるできるようになります。イブラーヒーム・ハックの作品「マーリフェトナーメ」に語られたように、

我は収まりきらぬ、この天と地の内には、

宝庫は見出された、言葉はたらかの源から。

本来、この2行連句は聖なるハディースを違った表現で説明しています。「我は秘められた宝庫であった。我を知るようにと我は被造物を創造した。」

イスマール・ハック・ブルセウィーもまた、「ケンズィ マフフィー (秘められた宝庫)」という作品の中で以下のように明示しています。

次号へつづく...

汎神論：〔pantheism〕すべてのものに神が宿っているとしたり、一切万有の全体がすなわち神であるとしたり、総じて神と世界との本質的同一性を主張する立場。ウパニシャッドの思想・ストア哲学・スピノザの哲学など。汎神教。万有神論。

注4：ムフィッディーン・イブン・アラビー (1165-1240) 著名なスーフィー思想家。



## ドゥア (祈り)のある毎日へ

おお、その偉大さゆえに万物が慎み深くなるお方よ

おお、そのお力ゆえに万物が服するお方よ

おお、その眷ゆえに万物が平伏するお方よ

おお、その壮厳さゆえに万物が従うお方よ

おお、その王権のもと万物が従うお方よ

おお、その畏敬の念により万物が従うお方よ

おお、かれへの畏れゆえに山々が砕け散るかのごときお方よ

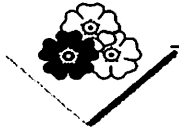
おお、かれの命 (めい)のもとに天が立ちつづけるかのごときお方よ

おお、かれのお許しのもと、大地が動かず定まるかのごときお方よ

おお、被造物を害さないお方よ

6. あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。<sup>6</sup>

<sup>6</sup> 偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌルカビール) には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



## ズィクル(唱念)

ハニーファ富岡貴子

あるムスリマの呼びかけで、毎週木曜日の晩 8:30 から 15 分間、ズィクルをしている。

「ラー イラーハ イッラッラー」を繰り返し唱えていると、あのとときの不思議な感覚がよみがえってくる。それは約 1 年前の出来事だった。

ある先生の話の聞いているうちに、涙がとめどなくあふれてきてどうしようもなかった。アスタグフィルッラー、アッラーに対する己の不遜さを恥じ入り、“穴があつたら入りたい”というより“消えてなくなりたい”と思った。己の存在がどんどん小さく感じ、砂粒よりもちっぽけな存在だと感じた。それと共に、「アッラーの偉大さ」がどんどん膨らんで迫ってきて、押しつぶされそうになり、のみこまれてしまった。

そして溢れる涙と共に私の心が洗い流されていく感じで、包み込まれているような何ともいえない静寂で穏やかな安らぎに満たされた。

その後、屋外に出て自然の中で礼拝をし、ズィクルをした。外の空気は新鮮で澄んでいて、おいしく感じた。涙で濡れた目には外の自然は（木々も草花も大地も山も湖も空も…すべてが）まぶしく美しく見えた。凜としてすがすがしいその姿はクルアーンの節のごとくアッラーを讃美しているようだった。水辺を這うイモリも餌を運ぶ蟻もしかり。空飛ぶ鳥の鳴き声も清んで美しい音色で讃美しているようだった。急に「アッラーの偉大さ」を感じ、全ての恩恵を与えてくれているアッラーに感謝の念がわきおこってきて、アッラーを讃えたくなった。

大地に平伏してアッラーを讃美し、自然と一体と

なって礼拝する。そのままずっとサジダしていたい衝動にかられる。

そしてズィクルした。なぜかわからぬが、「ラー イラーハ イッラッラー」を唱えているうちに、また涙が溢れでてくる。誠に“存在するのはアッラーのみ”。アッラーに抱かれているような、包み込まれているような安堵感があった。

“アッラーは全て、全てはアッラー、あるのはアッラーのみ、アッラー以外何のものもなし”と感じた。

「ラー イラーハ イッラッラー」を唱えていると、そのときのことがよみがえってくる。繰り返し唱えているうちにだんだん気持ちが静かになり落ち着いていく。アッラーに仕え、帰依することこそが人間の本来の姿であり、ズィクルをしているとそれを想起し“アッラーに帰る”思いがする。“アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがない”というクルアーンの言葉は本当だった。

また同じ時間にともにズィクルしている人たちを想うと、“一致”を感じる。

娘 2 人もやりたいというので、いっしょにズィクルをしているが、娘達の感想は“落ち着いた、気持ちよかった、楽しかった”と言う。毎週その時間を楽しみにしている。こうして娘達ともズィクルの時間を共有するのうれしい。今後もこの時間を大切にしていきたい。

\*\*\*\*\*

・天にあり地にある凡てのものは、アッラーを讃



える。(鉄章 57/1)

・7つの天と大地、またその間にある凡てのものは、かれを讃える。何もかも、かれを讃えて唱念しないものはない。だがあなたがたは、それらが如何に唱念しているかを理解しない。本当にかれは忍耐強く寛容であられる。(夜の旅章 17/44)

・あなたは、天地の間の凡てのものが、アッラーを讃えるのを見ないのか。羽を拡げて飛ぶ鳥もそうである。皆それぞれ礼拝と唱念を心得ている。アッラーはかれらの行っていることを知っておられる。天と地の大権はアッラーの有であり、アッラーに(凡てのもの)帰り所はあるのである。(御光章 24/41-42)

・(かれこそは)天と地の創造者である。かれが一事を決められ、それに「有れ。」と仰せになれば、即ち有るのである。(雌牛章 2/117)

・それがアッラー、あなたがたの主である。かれの外に神はないのである。凡てのもの創造者である。だからかれに仕えなさい。かれは凡てのことを管理なされる。(家畜章 6/102)

・ジンと人間を創ったのはわれに仕えさせるため。(撒き散らすもの章 51/56)

・だから、あなたの主を讃えて唱念し、サジダして、定めの時が訪れるまで、あなたの主に仕えなさい。(アル・ヒジュール章 15/98-99)

・東も西も、アッラーの有であり、あなたがたがどこに向いても、アッラーの御前にある。(雌牛章 2/115)

・あなた以前にも、われが遣わした使徒には、等しく、「われの外に神はない、だからわれに仕えよ。」と啓示した。(預言者章 21/25)

・一途にサジダして(主に)近付け。(凝血章 96/19)

・われの印を信じる者とは、それが述べられた時に敬慕し身を投げだしてサジダし、主の栄光を讃えて唱念する、高慢ではない者たちである。(アッ・サジダ章 32/15)

・またあなたがたは朝夕、魂を込めて謙虚に、恐れ謹んで、言葉は大声でなく、あなたの主を唱念しなさい。おろそかな者の仲間となってはならない。本当にあなたの主の側近にいる者は、かれを崇めるのに慢心することなく、かれの栄光を讃えて唱念し、かれにサジダする。(高壁章 7/205-206)

・災難に遭うと、「本当にわたしたちは、アッラーのもの。かれの御許にわたしたちは帰ります。」と言う者、このような者の上にこそ主からの祝福と御恵みは下り、またかれらは、正しく導かれる。(雌牛章 2/156-157)

・本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム(主の意志に服従、帰依すること)である。(イムラーン家章 3/19)

・(本当に)信仰するならば、アッラーの教訓に、また、啓示された真理に、心を虚しくして順奉する時がまだやって来ないのか。(鉄章 57/16)

・あなたに啓示された啓典を読誦し、礼拝の務めを守れ。本当に礼拝は、(人を)醜行と悪事から遠ざける。なお最も大事なことは、アッラーを唱念[ズィクル]することである。アッラーはあなたがたの行うことを知っておられる。(蜘蛛章 29/45)

・本当にアッラーは、御好みの者を迷うに任せ、悔悟してかれに返る者を導かれる。これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがないのである。(雷電章 13/27-28)

・アッラーのみ使いはいわれた。「アッラーは次の

ようにいわれた。“私は、私を思うしもべのその思いの中にいる。私は、私を祈念するしもべと共にいる” み使いは次いでこうも話された。「アッラーに誓って。アッラーは、あなた方の誰かが迷った駱駝を水のない砂漠でみつけ出した時の喜び以上に、しもべの懺悔を喜び給う。アッラーは、“しもべが私に、手のひらの長さほどでも近づけば、私は腕の長さほど彼に近づき、しもべが腕の長さほど私に近づけば、私は両手をひろげた長さほどしもべに近づくであろう。また、しもべが私の方まで歩いて近づいてくるなら、私は走ってしもべの方に近づくであろう”といわれた」(「サヒーフ ムスリム」3巻 p.633)

・アッラーには一群の絶えず移動する天使がついており、彼らはズィクルの集会があると、それに参加するのを常としている。天使たちは、ズィクルの集会があると人々と共に座る。人々と天使の間は天使たちの翼で、満たされ覆われるほどになる。ズィクルが終り人々が散会すると天使たちは天に昇る、(「サヒーフ ムスリム」3巻 p.602)

・アッラーのみ使いはいわれた。「“讚美すべきはアッラーのみであり、全ての賞讃は彼のものです。アッラー以外に神はなく、アッラーこそ最高の御方であられます” という言葉は、私にとって太陽の昇るこの世界の全ゆるものの中で最も大切な言葉です」(「サヒーフ ムスリム」3巻 p.605)

・アッラーのみ使いの処に砂漠に住むアラブ人がきて、「どうか私が唱えるべき言葉を教えてください」と頼んだ。み使いはこの時、「“アッラー以外に神はない。唯一者にして彼には比肩するべきものはいない。アッラーは最高の偉大者であられる。

全ゆる称賛は彼のためにある。諸々の世界の主アッラーに讃えあれ。威厳あり賢明なるアッラー以外に力や強さを持つものはおらない”と唱えなさい」といわれた。これに対し、そのアラブ人は「それらは、主に対する言葉ですが、私自身については、どう祈ればよいのですか」といった。み使いは、この時、「“おお、アッラーよ、私に許しを与えて下さい、私に慈悲を与えて下さい。そして正しい道にお導き下さい、私に食物をお与えください”と唱えなさい」といわれた。(「サヒーフ ムスリム」3巻 p.606)

・み使いは、次のように唱えられた。「アッラーよ、私が無気力、怠惰、臆病、吝嗇[りんしょく]、蹉碌[もうろく]などの状態にならぬよう、また墓での災いをうけぬようお守り下さい。アッラーよ、私の魂を真摯たらしめ、清めてください。あなたは最もよく清める御方です。あなたは、また、魂を守る友であり、保護者でもあります。アッラーよ、私たちが役に立たぬ知識や謙虚さを忘れた心、また、満たされない心などを持ったり、更にまた、あなたに受け入れられない祈願を行なったりすることがないように、私たちをお守り下さい」(「サヒーフ ムスリム」3巻 p.619)

・慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。万有の主、アッラーにこそ凡ての称讃あれ、慈悲あまねく慈愛深き御方、最後の審きの日的主宰者に。わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。わたしたちを正しい道に導きたまえ、あなたが御恵みを下された人々の道に、あなたの怒りを受けし者、また踏み迷える人々の道ではなく。(開端章 1/1-7)



## 「忍耐とは、災難の最初の衝撃を受けた時にあるものである」第1回

このハディースには、次のようなエピソードがある。

預言者ムハンマドは、墓地においてイスラーム以前の風習が続けられているのをご覧になって、信者たちが墓地に出かける事を禁じられたことがあった。しかしその後その禁止は解かれ「私はあなた方が墓地に出かけるのを禁じていましたが、これからは墓地に出かけてください」と命じられ<sup>7</sup>、墓参りを推奨されるようになった。なぜなら墓地には、人々を終わりのない欲望から解放するための、この上もなく効果的な忠告が秘められているからである。預言者御自身もしばしば墓地を訪問され、毎週少なくとも一回はウ فدの戦いの殉死者たちの墓に行かれた。

ある時墓参りをされた時、一人の女性が息子の墓の前で大声で泣きながら、体をかきむしるようにして、不適切な表現をしているのをご覧になられた。預言者ムハンマドは彼女のそばに行かれ、忠告しようとしたが、彼女は預言者の顔を知らなかった。「邪魔をしないで。あなたは私がどんな目にあったか知らないのよ!」と言ったのだ。預言者は何もおっしゃらずに彼女のそばから離れられた。その場にいた者たちはその女性にそのお方が預言者である事を教えた。彼女は驚愕した。知らずに預言者に失礼な態度を取ってしまったのであった。大急ぎでムハンマドの家を訪問した。ドアをノックもせず家の中に駆け込み、預言者にわびた。預言者ムハンマドは、彼女に次のように言われたのであった。

「忍耐は、災難の最初の衝撃を受けた時にあるものである」<sup>9</sup>

預言者は、この数語からなる言葉で何冊もの本になるようなテーマを奇跡的な表現で語られているのである。

### 忍耐の種類

災難に対しての忍耐、宗教行為における忍耐、罪に抵抗する時の忍耐...

忍耐(サブル)という言葉と、アラビア語で「サビル」という草(ニガヨモギ)は同じ語根を持つ言葉である。ニガヨモギが毒のように苦いことはよく言われる。医学的には、薬草として知られるものでもある。忍耐とは、この薬草を食べるようなもので、非常なつらさを伴う。しかしこの苦さは、最初のうちだけのものなのだ。結果は常に、甘い味がするのである。

<sup>7</sup> Muslim, Jana'iz 106; Ibn Maja, Jana'iz 47

<sup>9</sup> Bukhari, Jana'iz 43; Muslim, Jana'iz 14,15

家庭内における両親が自分の子供たちにまったく睨みがきかないというようなことは非常に大きな家庭問題である。調和を保つ権力者がいない場合、その家庭はいつ崩壊してもおかしくない状態に陥る。叱ってくれる人がいないと子供たちが自分たちの判断力だけではなかなか正しい道へ辿り着けないのは事実である。

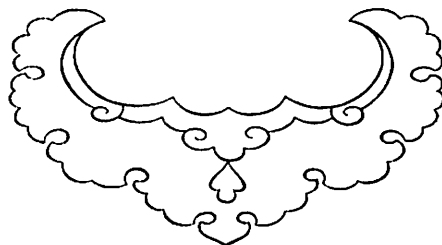
アッラーはクルアーンにおいて、次のように仰られている。

男は女の擁護者（家長）である。それはアッラーが、一方を他よりも強くなされ、かれらが自分の財産から（扶養するため）、経費を出すためである。それで貞節な女は従順に、アッラーの守護の下に（夫の）不在中を守る。あなたがたが、不忠実、不行跡の心配のある女たちには諭し、それでもだめならこれを臥所に置き去りにし、それでも効きめがなければこれを打て。それで言うことを聞くようならばかの女に対して（それ以上の）ことをしてはならない。本当にアッラーは極めて高く偉大であられる。〔婦人章（アーン・ニサーア）：34〕

男の人には家庭内の調和を作り上げる責任がある。ほとんどの場合、第一責任者ともいえる。実は子供たちにとってこういった責任者が必要である。家庭で責任感のある親を見て育った子供は社会に出ても無責任な人にはならない。逆に家に無責任な両親がいて、両親二人からもいい加減な扱いを受ける子供はどうしていいのか、親のどの言葉を信じるべきか分からなくなる。

もう一つ、子供が悪いことをしてしまって父親に叱られた時、母親に抱いてもらえるような環境を作らなければならない。これによって子供は良い・悪いの区別が分かるようになり、寂しい思いをせずに育つのである。父親にも母親にもやさしくされなくて、叱られてばかりいる子供はどちらの言うことも聞かなくなる。

何よりも家庭を直接アッラーに結ぶ必要がある。アッラーと結ばれて、父親がアッラーのハリーファ（代表者）になっている家庭では大きな問題が起きない。





## 預言者たちの風格：第3回

### 無知の時代の人々も預言者ムハンマドを信頼した

マッカの住人たちは、預言者ムハンマドのことをただ名前と呼ぶのではなく、その名に「アル・アミーン」、信頼できるという言葉を加えて呼んでいた。彼のこの素質も、よく知られているものである。我々が毎日唱えるお祈りにもそのことが含まれているのは、我々にとって何と幸福なことであろう。預言者ムハンマドのこの人格を常に思い出すことができるからである。

カアバ神殿が工事され、ハージャル・アル・アスワッド<sup>10</sup>が工事前の元の場所に戻されることになった時、皆がその石をそこに置く名誉を求め、揉め事になりかけたことがあった。人々は刀を半分抜いた状態で、自分の名誉を求めた。そのうち、結論が出た。カアバに最初にやって来た人に、決めてもらうことにしたのである。皆が興味深く待っていた。もちろん、預言者ムハンマドはこの出来事について何も御存じなかった。そのお方の、敵であれ味方であれ信頼を与える笑顔がそこに現れて、待っていた者たちは皆喜んだ。「アル・アミーンが来ている！」と彼らは言い、その決定に素直に従ったのである。<sup>11</sup>

なぜなら、彼らはこのお方を完全に信頼していたのである。預言者ムハンマドは、その時まで預言者としての任務を始められてはいなかった。それにも関わらず、そのお方は皆に信頼されていたし、預言者としての素質も十分身につけられていた。

そう、よい素質というものは、敵であれそれを認めるものである。当時、最も手ごわい敵であった、アブー・スフヤーンでさえ、預言者の誠実さを認めていた。

預言者ムハンマドは、周囲の支配者たちに手紙を送っていた。その手紙の一つは、ローマ帝国の皇帝ヘラクレイオスに届いていた。彼は手紙を全て読んだ。そして当時、ダマスカスにいたアブー・スフヤーンを呼び、二人の間でこのような会話がなされた。

「彼に従う者たちは誰ですか。富める者ですか、貧しい者ですか」

「貧しい者です」

「これまでに、一度彼に従った後彼から去って行った者はいますか」

「今までのところいません」

「信者の数は増えていますか、減っていますか」

「毎日少しずつ増えています」

「彼が嘘を言うのを見ましたか」

<sup>10</sup> “幸せな石” という意味での黒い聖石

<sup>11</sup> Ibn Hanbal, Musnad, 3/425; Ibn Hisham 1/209

「いいえ、私たちの中では、誰も見たものではありません」

ヘラクレイオスは、ムスリムたちの最大の敵であるはずのアブー・スフヤーンがこのように言うのを聞き、こう言わずにはいらなかった。

「人間に対してこれほど長い年月嘘をつかなかった者が、神に対して嘘をつくなどということは考えられない」<sup>12</sup>

ここではこのハディースにはテーマに関連するものとして簡単に触れただけであるが、アッラーの預言者の誠実さについての二つの証拠を示している。一つめはローマ帝国の皇帝ヘラクレイオスの言葉である。二つめは、まだムスリムになってはいなかったアブー・スフヤーンという言葉である。

どういうわけか、ヘラクレイオスは、自分の地位や人気への執着を乗り越え、すぐ手の届くところまできていたこの真の、永遠なる財産を手にはできなかった。それにもかかわらず、預言者ムハンマドは預言者であることを認め、そのお方に対して敬意を持った振る舞いをしたことは、ある意味で彼に先見の明があったことを示している。我々にとってもうれしい出来事である。

実際、ヘラクレイオスの述べたことは非常に意味深いことである。40歳になるまで、普通の人間に対してさえもどんな小さな嘘さえついたことのない人間が、死を近くに見るような状態でありながら、神に対して嘘をつくなどということがあり得ようか。

まだムスリムになっていなかった頃のヤーシルは、息子のアッマルに尋ねた。

「どこに行っていたのか」

「預言者ムハンマドのところに」この返事は、ヤーシルにとって十分なものであった。

「彼は信頼できる人だ。マッカの人たちはそう知っている。もし彼が預言者だと言うのならそれは本当だろう。なぜなら誰も、彼が嘘をついたのを聞いていないのだから……」

このような言葉、承認は、数人に見られたことではない。光の時代と、それに続く長い期間に、預言者ムハンマドを知る者たちのほとんど全てに見られたことである。



<sup>12</sup> Bukhari, Bad'u l-Wahy 6



## 一日五回の礼拝の定時 (第2回)

第9のことば〔一日に行なうサラート（礼拝）を5回に定時された理由について説明する〕

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

فَسُبْحَانَ اللَّهِ حِينَ تُمْسُونَ وَحِينَ تُصْبِحُونَ وَلَهُ الْحَمْدُ

فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَعَشِيًّا وَحِينَ تُظْهِرُونَ

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

「それで、夕暮にまた暁に、アッラーを讃<sup>たた</sup>えなさい。天においても地においても、栄光は彼に属する。午後遅くに、また日の傾き初めに（アッラーを讃えなさい）」<sup>13</sup>

兄弟よ。あなたは日に五回の祈りの時間がなぜ指定されているのか、それにはどんな英知が含まれているのか、尋ねた。私はそのたくさんの英知の中から、ほんの一部分について述べてみよう。

それぞれの祈りの時間は、地球の公転におけるそれぞれの時間の区分の始まりを示しているのと同時に、神の力と、普遍的な神の摂理の鏡でもある。それで、さらなる賛美でもって全能の神をたたえることが定められている。そして、それぞれの時間の区分の間で蓄積された神への賞賛と感謝で、神をたたえることが定められているのである。それが規定された礼拝の意味である。この、少々繊細で、そして深い意味を理解するために、あなた方は、次の五つのポイントを私自身の精神と一緒に、聞いてほしい。

### 第三のポイント

人間が、偉大なる宇宙のミニチュアの例であるのと同様、開端（アル・ファーティハ）章は偉大なる聖クルアーンの輝かしい例である。定められた礼拝は全ての崇拝の、広い意味を持つ、輝かしいインデックスであり、被創造物の全ての階層の崇拝の陰を示す地図である。

### 第四のポイント

一週間を示すことの出来る時計があるとす。その時計の秒針、分針、時計、そして日を示す針は、それぞれ、お互いがお互いの見本であり、お互いの後に従う。この世界の全能なる神の時計の秒針のようである夜と昼の移ろいも、分針のようである年の移ろいも、時計のようである人間の寿命の段階も、日を示す針のようであるこの世界の寿命の段階も、全てそれぞれがお互いを当てにして、お互いの例であって、お

<sup>13</sup> 聖クルアーン ビザンチン（アッ・ローム）章30/17～18

たがいに似ていて、おたがいを呼び起こすのである。たとえば；

- ・ ファジュール、日が昇るまでのこの時間。これは、春の始まり、母の胎内での受胎の瞬間、天と地の創造の最初の六日間に似ていて、それらを心に思い起こさせる。それは、それらの中に存在している神の偉業を呼び起こす。
- ・ ズフル、正午を過ぎたばかりの時間。これは、真夏、若さの素晴らしさに似ていて、それらを示している。この世の歴史においては、人間の創造の時期であると言える。そして、それらが含んでいる慈悲と恵みの顕現を心に訴える。
- ・ アスル、午後。これは秋のようであり、老年期のようであり、至福の時代として知られている最期の預言者の時代のものである。そして、それらの中に存在する、慈悲深い神の行為を思い出させる。
- ・ マグレブ、日没の時。秋の終わりにおける多くの創造物の消失、人の死、復活の始まりにおけるこの世の破壊を思い起こさせることによって、心に、神の栄光と、神への屈服を思い起こさせ、そして人は不注意なまどろみから目覚める。
- ・ イシャー、たそがれの時。黒い覆いによって昼の世界の全てを覆い隠す闇の世界を思い起こさせることによって、そして冬が、その白い礼服によって、地上の死者たちを隠し、死んでいったものの残した業績までも、忘却のベールに覆われることを思い起こさせることによって、そして、試練のステージであるこの世界が沈黙のうちに閉じられていくことを思い起こさせることによって、力強く、輝かしく、全てを支配する存在を宣言する。

夜は、冬と墓、この世とあの世の間にある世界を心に思い起こさせることによって、人間に、人間の精神がどれほど貧弱しているか、最も慈悲深い存在をどれほど必要としているか、思い出させる。そして、タハჯюдの礼拝は、それが、墓場の夜、この世とあの世の間の世界の暗さにおいてどれほど必要な光であるかを人間に知らせる。それは警告でもある。そして、真の与え給うものの無限の恵みを思い出させることによって、神が賞賛と感謝にいかにかに値するかを言明する。

そして第二朝。これは、復活の朝を思い起こさせる。夜の後の朝が、妥当で、必要な、そして確かなものであるなら、この世とあの世の間の世界に続く復活の朝と春は、それと同様の存在なのだ。

つまり、ちょうどこれらの五つの時がそれぞれ重要な局面をポイント付けし、大きな変化を思い起こさせるように、日々の、驚くべき神の業は、それぞれの年、時期、時代における神の力の奇跡、神の慈悲の授けものを思い起こさせる。すなわち、規定された礼拝は人の生まれながらの義務であり、信仰の基本であり、それらは最も適切で、それぞれの時間に適しているのである。



## 『パッション』 The Passion of the Christ

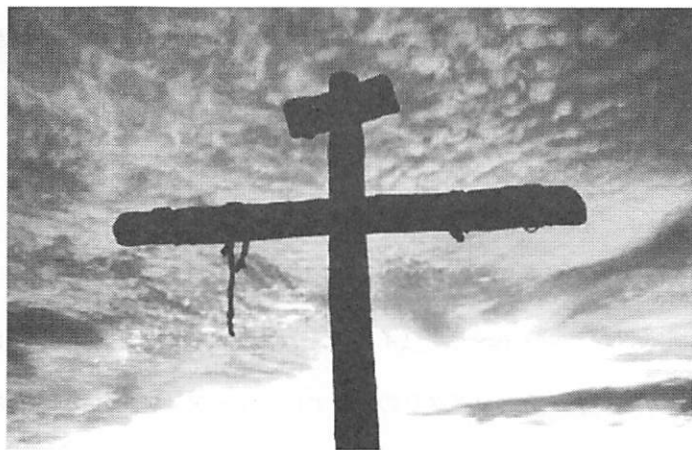
公開前からかなりの話題になっていた『パッション』を見てみました。話題になっていた理由は色々ありますが、「俳優メル・ギブソンが監督を務めた」という事のほかに、「アメリカで公開してショック死した人が出た」「自分の犯罪を自首した人が出た」「ユダヤ人に対して良くない発言があった」など、あまりいい意味ではなかったように思います。

話は、誰もが知っている（といっても過言ではないと思うのですが）キリストの最後の12時間を描いたものです。ゲッセマネでの祈りのシーンに始まり、その前のシーンを回想風に織り交ぜつつ、イエスの死で一応の終結を迎えます。話の中の細かなところや背景などは、私の知る限りでは4福音書にかなり忠実でした。人々も当時使われていたアラム語とラテン語（ローマ人が使用）を話していますから、英語字幕がついています。俳優陣も東欧の人々を多く起用し、エルサレムという場所に合った風貌であるように思われます。

話の中心は、イエスが捕らえられてから刑罰を受けるところになっています。聖書にはずいぶんとあっさり「こうしてその時ピラトはイエスを捕らえてむち打った」（ヨハネの福音書19：1）とあるだけですが、これが映像になるとものすごい。棒のような鞭と鉄球のようなもののついた鞭を使い（これは当時使われていたものだそうです）、肉が裂けてもうち続ける…。見ているのが辛くなるほどでした。また、人々から嘲笑され、侮辱されている姿も、一人の人として、何故ここまでされなくてはならないのか、これは人が

人にすることなのだろうか、と感

じました。それと同時に、今まで文章としてあっさり読んでいたことが、「本当は」どういうことなのか、ということを考えていなかったことに思い当たりました。想像力を働かせてものを読んでいるつもりでも、それが本当はどういうことなのか？ということはいあまり考えていなかったのでしょうか。鞭打たれたあとに自分の架けられる十字架をかついで歩かされるのは



どんなことなのか、磔にされるというのはどういうことか…。人々がそれらについてよく知っている時代や場所なら、文章や話から理解するのは容易であったかもしれませんが。ですが、私などは鞭打ちがどんな罰か、磔にされるにはどうやってされるのかなどあまりよく知らず、漠然としたイメージと字の上での知

識でしかありません。そういう者にとって、映像で見せられると言うのは強烈なアピールがあります。次にイエスの話を聞いたときには、彼の痛みを思い出さずには居られないことでしょう。また、他のものを読む時にも「それは本当はどういうことなのか？」ということを考えながら読まないといけないな、と思うようになりました。これは大変重要な事で、ノーベル賞学者のリチャード・ファインマンも著書『困ります、ファインマンさん』（岩波書店）の中で父親が本を読み聞かせてくれたときに「(恐竜の)身長 25 フィート」とあると、「ということはどういうことか、考えてみよう。25 フィートってことは、こいつが家の庭に立っているとすると、この二階の窓に頭を突っ込めるくらいの背の高さなんだ」と、書いてあることを事実当てはめて解釈をつけてくれたため、あることについて読んだ時本当はどのような意味なのか、何を言おうとしているのか考える習慣がついた、と書いています。

今の世界情勢を見ていると、私を含めて人々に足りないのはこのような、ある事を聞いたり見たりした時に、それが一体どういうことなのか、そこでは何が起きているのか、人々は何を考えているのかを想像する力ではないのかな、と勝手に思います。人の気持ちを考えると、大分相手に優しくなれるように感じます。ただ、相手がこちらの事を同じように考えてくれるとは限らないのですが…。

ただ、私としては「痛み」を見ることから考えさせられる事以外に、もっと心に沁みるようなイエスの言葉やシーンなどがあつたらよかつたのではないかな、と感じました。見終わった直後など、単なる「受難劇」じゃないかなあ、と思ったほどです。その「受難」の持つ意味などについて考えたのは、少したつてからでしたから…。とはいえ、(映画を見るとわかるのですが)イエスの最後の 12 時間に多くの人々が彼に心動かされています。それは今の時代も同じで、その最後の時間を見ることにより人の心を動かす事が出来る、という理由でメル・ギブソンはこの場面を選んだのでしょう。

内容や解釈に関しては、妥当性や是非など見る人それぞれの解釈があると思います。それに、話を知っている人が、その人の信条や記憶と視覚で追体験するようなタイプの映画のような雰囲気ですから、日本でヒットするとはあまり思えません。ですが、そういう事はさておき、それ以上に考えさせられる事の多い映画でした。

-----  
『パッション』 2004 年 アメリカ 2 時間 7 分

監督：メル・ギブソン

出演：ジム・カヴィーゼル (イエス) / マヤ・モルゲンステルン (マリア)

モニカ・ベルッチ (マグダラのマリア) / マッティア・スブラージア (大司祭)



(第3回)

第三の考え方：何でも自然が作っているということの不可能さ

a) 自然は、宇宙のことだというふうには解釈されているならば、物質が自分を創造していることになって、その不可能さは、第二のところでも述べた。

自然は、法則のことだという解釈だったら、こういうふうには説明した方がいいだろう。法則を統率するものがないことには、速やかに行われるはずがない。

物質の存在を統率するために法則が存在しているから、物質が存在していないと法則も存在できない。だから、法則は物質を作ることが不可能なのだ。例えば、太陽と地球があるから、太陽と地球の間の引力もあるわけで、太陽と、地球が存在していなければ引力も存在しない。だから、引力が太陽と地球を創造することが不可能だ。これは、ある建物の計画があるからといって、建物は自分で建つことができないと言うことと同じだ。

宇宙の秩序から見るといろいろな法則が精密に決められている。又、宇宙の基礎となる法則を決めたものは、とても慈悲深くなければならない。なぜならば、それによって生命が成り立っているからだ。例えば、大体の物質は温度が高くなると拡大するのに、水は凍ると膨張する。もし、そうでなかったら、湖や、川に生き物が住めなかった。理由を Prof. Dr. Frank Allen はこう説明する「水が持つ四つの特徴のおかげで生命が、成り立っている。

特に、冷たくなると体積が拡大する特徴は、生命の元と言ってもいいだろう。冬が厳しいところでは、余計大切だ。水の温度が下がると、汎山酸素を吸収する。4度になると、この吸収は最高に増

大する。

気体が液体より密度が小さく、湖や川の中の氷は水より密度が小さいので上の所に付く。

そのおかげで水の中の生き物が生きられる。水が凍ると熱を放出するから命が続く。」というのは、Prof. Dr. Frank Allen の言葉なのだ。

化学の教授である Dr. Thomas Davids Parks はこう言う。「周りの世界を見てみる必要があると思う。我々人間は、見慣れた光景の中に、実はとても素晴らしいことがたくさんあることに気づく。

水のことを考えてみよう。水の分子量は18だ。分子量からみて1気圧0度の状態で気体であるはずだ。

例えば、分子量が17であるアンモニアは、1気圧、 $-73$ 度で、もう気体になってしまう。水が1気圧0度で液体であるのは本当に興味深い。水の持っている特徴は生命のためにとても大切であって、水が、精密な計画を使って作られなかったとしたら、こんなに汎山の素晴らしい特徴を持つことは有り得なかつただろう。

世界の4分の3は、水だ。水は大気と熱のバランスのために不可欠なのだ。もしも水の特徴が、少しでも変わったとすれば、とても激しい熱の変化が起こって大変な災難になってしまうだろう。

水は、1気圧0度では液体であって、長い時間、流体でいられ、とても高い圧力にでも耐えられるという特徴のおかげで大気での熱は、一定できるわけだ。

水が、これらの特徴を持っていなかったとすれば、地球は、生命体の生存に適していなかっただろう。」というの、化学教授の Dr. Thomas Davids Parks の言葉だ。

水は他の液体が持っていない多くの特徴を持っている。これは、水や、全てのものを創造した全知全能の唯一なる神が水を自分が創造した生命のために役立てたいと、御希望なさったに他ならない。

水の素晴らしい特徴を、又、幾つか言ってみよう。水の流動性はとても高い。そのおかげで、土の中からもらった栄養が道管により、樹木の一番高いところまで伝えられていく。

水が何かの物質を溶かすものとして一番よく使われている。我々人間の血液の70%は水だから生物学的な反応ではとても大切な役割を果たしている。水蒸気の流動性は熱よりも高いのだ。

多くの科学者は水のこの特徴について研究をしていろいろな理論を発表した。我々は、この特徴がどうやってあるのかという疑問のみならず、何故、この特徴があるのかという疑問も問わなければならない。

考えてみると、水の持っている素晴らしい特徴に驚かされる。

これは水だけではないということに気が付く。我々の限られた頭脳力ではとても分からないことが自然の中には有り過ぎて、全知全能の唯一なる神によって、創造されているという説得以外には説明しようがない。私は宇宙の中で起こっていることを観察して全知全能の唯一なる神の創造力を敬うのだけではなく、全知全能の唯一なる神に対する愛情も感じて、全知全能の唯一なる神が創造物に慈悲を与えて大切にされるのではないかというふうにも思っている。

哲学者の Vahiduddin Han は、「化学から見たイスラム」という本で、こう書いている。「近代的化学は自然の中で起こっていることをいろいろと説明してくれるが、それらの基礎になる理由について

は一切説明できない訳なのだ。化学は、これは何なのかという疑問は解決できるが、これは、何故こうなっているのか、という疑問を解決できないのだ。私達は、この二つ目の疑問について話をしよう。自然主義者の哲学者が証拠として挙げている例から行こう。自然主義者の彼らはこう言う。『ひよこは生まれた後、ある時間を硬い殻に囲まれた卵の中で過ごす。成長すると、その硬い殻が破れてひよこは卵から出られる。以前からこれは、神のおかげだと信じられていた。けれど現在の科学者は顕微鏡で見て21日目にはひよこのくちばしは角のように硬くなっていて、それを使ってからを破って出られるから、ひよこが卵から出られるのは神のおかげではない。生物の生態系との関係だけなのだ。』というのが自然主義者の哲学者の言葉だ。けれどよく考えてみよう。化学として発明された新しいことは原因ではなくて、働き方なのだ。つまり、ひよこは、くちばしが硬くなって卵から出られると言うのはただ生態系の働き方のみを説明していて、原因そのものではない。なぜならば、私達はひよこのくちばしがなぜ硬くなるのかという質問もできるわけで、何故という言葉の積み重なりは、原因にはならない。そうした生態系の構造や自然界の現象は唯一なる創造者しか作り出すことができないし、そのバランスを維持することはできない。

つまり、我々人間は丁度、ひよこが卵から出られる日に、ひよこのくちばしが、何故、硬くなっているのかという疑問も問わなければならない。

この現象は、誰かがひよこの要求を知って、くちばしを硬くしたとしてしか説明できない。それは、卵か、鶏か、ひよこの自分か、それとも全知全能の唯一なる神なのかという疑問を問うとただの偶発的な動機である卵や、ひよこや、鶏が、真実の原因にはならず、硬い殻に囲まれた卵の中のひよこの要求を知っているのは全知全能の唯一なる神にほかならないと言うことに気が付く」というのは哲学者の Vahiduddin Han の言葉なのだ。

同じことについて生物学者の Prof. Dr. Paul Cleirans Brosolold は、こう言う。「現在の科学者達は自然の

働きを詳しく全部説明すると公表している一方、自然の働き方や理由の本当のところを説得できないことに自分たちが気が付いている。科学と人間の頭脳の力だけでは、原子のミクロの世界から星や、星雲のマクロの世界まで等、生命や人間のすばらしさの説明はとても無理なのだ。科学は星や星雲からなっている宇宙について色々と理論を積み重ねるが、宇宙の基礎になっているエネルギーは、どうやって創造されて現在にまで至ったのか説明できない。固定観念を持たず、理解力ある人間は、全知全能の唯一なる神を信じるべきなのだ。」というのは生物学者の Prof. Dr. Paul Cleirans Brosolold の言葉なのだ。

創造の基礎である全知全能の唯一なる神の選択性や慈悲や知恵などを理解しにくい偶発的な動機ではとても説明できない。生物が自分の属する生態系の中で必要とされる能力を判断して使えるのは物質によるものではない。なぜならば原子には、この特徴がない。太陽の光が映ると、小さなガラスや一滴の水にも太陽の七種類の色や熱が見られて、太陽の光が映らなると全部無くなってしまふということと同じなのだ。だから、私達は、この光は、太陽の光そのものであることを認識すべきなのだ。

そうでなかったら、一滴の水中に太陽が存在していると思わなければならない。だから、同様に、全知全能の唯一なる神は、慈悲深さと知恵を与えて、物質の世界への路へと導かれて始めて自然の素晴らしさが現れるのだから、自然の素晴らしさは、偶発的な動機によって創造されるのではない。

それで、全知全能の唯一なる神の存在と、慈悲深さと、知恵の深さに対して、同意したくないと言う者達は、全ての物質が、無限の能力と、無限の知識と、無限の知恵を持っていると信じなければならなくなる。

このことは、全知全能の神を信じないために無限の物質の神の存在を肯定し、認めることになる。

b) 非常に秩序があつて素晴らしい作品である、

色々な種類の樹木や、果物や、花を自然が創造したと仮定するために、非常に小さな土の中にも、現在の技術ではまだできていないほどの創造的な作業場の存在を認めなければならない。なぜなら、小さな土の中にも色々な種類の形や、香りや、色彩や味が作られている。

もし、これら全ては、全知全能の唯一なる神の力による物だと認めないなら、小さな植物鉢をいっぱいにするぐらいの土の中にも、あらゆる植物のために、それぞれの巨大な工場が存在していると思わなければならない。なぜならば、種というのは、炭素と、窒素と、酸素と、水素の秩序のない混合物であつて、空気と、水と、熱と光も理解しにくい簡単で、偶発的な動機に過ぎないのに無限種類と言えるそれぞれの花が、別々な形、別々な香り、別々な色彩、別々な味を持って小さな植木鉢に詰まった土の中から出てくるわけだからだ。

c) ここで、法則と創造者・計画とその計画を立てる人・小説と作家・絵と画家の区別ができない自然主義者の意見が、何故間違っているかを色々な例で考えてみよう。

“優れて発展した技術と、優れた文明を駆使して、何も無い砂漠の中にとっても素晴らしい宮殿が建てられた。ある日、その宮殿の中に入った一人の野蛮人がこの宮殿は何なんだろうと考えた。多分、この宮殿をきつと、この宮殿と同じような種類のものが造ったのだらうと予想してしまう。この宮殿を造った物を宮殿の中で探してみたがなかなか見つけられなかった。結局、その宮殿の中の物のリストや、取扱説明書、その宮殿の設計図が書いてある一冊のノートを見つけた。視力も、頭脳力も持たない一冊のノートが、この宮殿を建てて、こんなに美しくすることができないことも確かだが、この宮殿と全然別な種類のある物が建てたとも考えられないし、とも思った。この野蛮人が次にこう考えた。この宮殿の物の中での建物と一番関係深いのはこのノートだから、やはりこのノートが宮殿を造ったと考えよう。”

この例の中での何も無い砂漠とは無の世界であつ

て、素晴らしい宮殿とは宇宙を示している。この素晴らしい宇宙といわれる宮殿の中に入った自然主義者の野蛮人は、宇宙がある物質や、その他多くの物質により創造されたと予想してしまい、そのものを一生懸命に探した結果、本当の創造者でもある全知全能の唯一なる神によって、造られた創造物の名前のリストや、全知全能の唯一なる神が決めた法則が書いてある自然と呼ばれる一冊のノートを見つけてこう考えこんでしまう「動機がないと物の存在も有り得ないのだ。その動機が宇宙と呼ばれるこの宮殿と一番関係深い自然と呼ばれるこのノートなのだ。」

頭脳の力のないこの自然と呼ばれているノートが宇宙と呼ばれているこの宮殿を造ることは不可能だが、私は全知全能の唯一なる神など信じたくないから、このノートがこの宮殿を造ったのだと考えた。

この考え方の間違っているところは、自然という法則が創造力のある動機だと考えたところだ。このことについてもこういう例は考えられるだろう。

“ある日、軍隊という組織も、軍隊のルールも全然知らない一人の野蛮人が、とても巨大な兵舎に入って、軍隊の訓練を見たとき、射撃練習の中で一人の軍人の指示によって兵隊達が、発砲したのをみたとき、国や、軍隊の戒律など全然知らなかったので軍人達がお互いに糸で結ばれているのではないかと考えてしまった。”

この例の中の野蛮人が自然主義者と呼ばれる人であって、この巨大な兵舎は宇宙である。なぜならば、宇宙の秩序から見てみると宇宙の中に存在している全ての物質は、全知全能の唯一なる神のご希望に百パーセント従って、自分の役割を、欠点の無いように果たしていることが明らかだからだ。物質の創造者を、物質の世界の中で探すというこの間違っている考え方を支持する人達は、宇宙のことを調べるときに、全知全能の唯一なる知恵深い神が決められた自然に関するいろいろな法則を、物質が作ったと考えるという事から始めている。

自然は作品であって、技術者ではない。色々な法則が書かれているノートのような物であって、その色々な法則を決めて、そのノートに書いた創造者ではない。

このことを、宇宙があるときから存在し、その前には存在していなかったというところからも考えてみよう。

Prof. Dr. Frank Allen、このことについて次のように言っている。「熱力学の法則からみても、宇宙を成立させる色々な力が段々熱を出して、エネルギーを失っている。あるとき、使ってきた宇宙の中の全ての物のエネルギーが“0”になって、生命もなくなる。この事から高エネルギーを持っている太陽や、人間が今まで観察できた星や、生命が続いている地球の事を考えると、宇宙はある決まったときから存在し始めたことが明らかになる。

つまり宇宙も、宇宙の基礎となる自然という色々な法則も、宇宙と自然以外の力によって造られたわけだ。」というのが Prof. Dr. Frank Allen の言葉なのだ。

Sir James Jeans もこのことについてこう言っている。「近代化学によると宇宙エネルギーを失って、秩序が無くなる（エントロピー）。最終的な結果にまだ辿り着いていないのだ。もしも、最終的な結果にたどり着いたのであれば、生命が無くなっていただろう。宇宙のエントロピーの増加は連続的である。だからエントロピーもある時から大きく成り始めたわけで、そのときが宇宙が存在し始めたときと同じ筈なのだ。」というのが Sir James Jeans の言葉だ。

もう一つの証拠が宇宙の拡大である。宇宙の拡大の影響によって、とても巨大な星雲や、もっと小さい星のグループ等が、お互い、ものすごい速いスピードで連続的に離れていく。宇宙の存在の初めの頃は、宇宙全体が一つの物質だった。その後で宇宙の中にもものすごく大きい熱力学エネルギーがたまって、科学者によると約5千万億年前に大爆発が起こった。このことは宇宙にも決まった寿

命があるということを証明している。この発見に賛成し、全知全能唯一なる神の存在を否定するのはたいへん大きな矛盾である。これは、ニューヨークタワーが20世紀に建てられて、存在し始めたことを知りながらも、ニューヨークタワーが、誰も一切手をかけずに偶発的な動機により建てられたとか、ニューヨークタワーの設計図や計画図がニューヨークタワーを建てたのだとかいうふうに信じるのと、全く同じような誤解なのだ。

次に第四の考え方としてすべてが全知全能の慈悲深い創造主アッラーがすべてを創造し規律・

調節・統率しているという選択肢しかのこらない。この選択肢に関しては、「どうすればそういう全能な存在が信じられるか?」とか「来世も存在するのか?」とか「創造主や来世の存在は科学的か?」とか「自然現象に見られる創造主や来世の存在の証拠は?」などの疑問が浮かび上がります。それらの疑問に答えるために本書は、第2部の「四つ目の創造の軌道又は、在りて在る方・目に見えない創造主アッラーの存在意義、来世の存在との関連性・アッラーの美名(特徴)」に続きます。



## レシピコーナー

### ペイニル・ビスクヴィ (白チーズの焼き菓子)

このお菓子を温かいうちにフェタチーズと食べるのがおすすめです。

#### 材料

フェタチーズ 150g  
ヨーグルト 1カップ  
オリーブオイル 1/2カップ  
バター 1/2カップ  
卵 2個  
ペーキングパウダー 小さじ1  
薄力粉 400g  
塩 少々  
黒ごま 少々  
\*フェタチーズの代わりにお好みのチーズでも大丈夫です。

#### 作り方

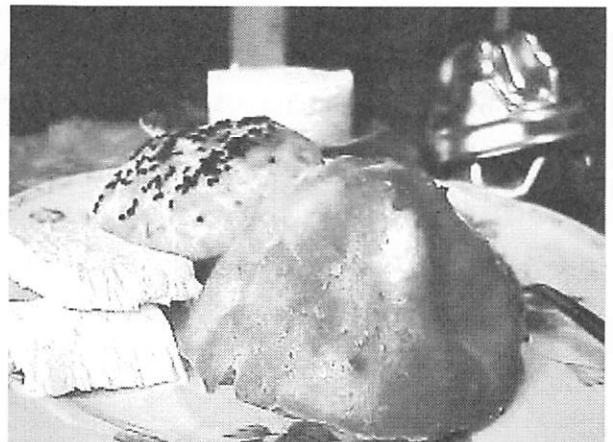
オーブンを170度にします。天板にオーブンペーパーを敷きます。

ボールにチーズ、ヨーグルト、オリーブオイル、溶かしたバター、卵、ペーキングパウダー、塩を入れて混ぜます。

粉を少しずつ入れて柔らかい生地になります。

大さじ1ぐらいとって手で丸めて天板にならべて卵を軽く塗って黒胡麻を振ります。

オーブンに入れて20~25分焼いて出来あがり。





日に日に暑くなり、衣替えの季節になりました。夏になると必ず聞かれるのがスカーフや、長袖の服を指して「暑くないの?」という言葉です。最初はこの言葉が気になりましたが、今では何とも思わないようになりました。毎年夏になると今年はどうな服装で夏をのりきろかなということを考えます。学校へ通うのに急いで自転車をこいでいると、学校へ着いた頃には汗がどっと出てくるときもあります。でもこういう経験を何度もしていると、自然と時間に余裕をもって学校へ行くようになりました。自分がムスリムになっていくと実感していくと同時に、またイスラームの勉強を進めるうちに、自分の服装が変わっていきました。最初は足を隠すようになり、長いスカートや、長いズボンをはくようになりました。次第に、半袖ではなく五部袖や七部袖になり、今では長袖を着るように心がけています。そしてスカーフもするようになりました。最初はスカーフをする事に抵抗があり、すっぱり頭を覆ってしまうと圧迫感があるような感じがしたので耳をだしてスカーフをしていました。初めてスカーフを被る私にとってはこの耳を覆う事にすごく抵抗を感じました。今のように慣れてしまえば、また自分自身が十分納得してスカーフを被っていれば、スカーフも普通の洋服の一部になり、洋服を選ぶのと同じように一緒にコーディネートすることが自然になりました。以前の私は、女の人が極端に胸を強調したり足を強調するような服装でなければ、つまり具体的には膝丈のスカートや、半袖を着ても特に性的な刺激はないのだから大丈夫じゃないかと考えていました。しかし、ここでのポイントは私が女性の視点から見たレベルであるということです。決して男性が女性を見るレベルではないということです。女性から見てこの服装なら大丈夫と思っても、男性にとっては刺激的ということがまれにあります。どんなに気をつけていても、刺激を受けてしまうことは自然な事のようにです。そこで私が理解するには、男性と女性の両者が気をつけなければいけないということです。男性からみて刺激的であれば、やはり女性はなるべく男性に刺激を与えないように気をつけるべきだし、逆に男性は女性がそのように注意を払っている事に対して尊重すべきだと考えます。そして私が気にかけるもう一つの点は、女性の体に対する価値についてです。女性の体は男性にとって刺激的につくられています。女性は男性の目から自分の体を守るべきです。手を出されないからよしとするのではなく、男性が自分に対して心理的に性的感情を抱くといったことから自分の体を守るべきです。人間の心理においてイスラームはこう言っています。人間は罪を犯すもので、それが自然です。しかし、罪の心があるからといって信仰が薄れているというのではなく、その罪の心にどう打ち勝つかというところで本当の信仰が試されるのです。

女性の体は貴重なものです。赤ちゃんは女性の体の中で育ちます。こんな貴重な体なので大切にされるべきだし、自ら大切にすべきです。日本での蒸し暑い夏が始まります。こんな暑さの中、なぜ体を覆うべきなのか、もう一度女性の体の価値について考えるよい機会ではないかと思えます。





迂闊さという眠りの中でよこたわり目覚めずに

迂闊さという眠りの中でよこたわり目覚めずに、

心の眼が蔽われているうかつな者達が多いことよ

真理の言葉に耳を傾けず、信じることもなく、

心の腐り、奢った無知な者達が多いことよ

学ぶ者達は高德な者達を敬わず、

迂闊さという眠りから目覚める事もない

石よりもより固い害ある言葉を放ち、

自我と戯れる勇ましき者達が多いことよ

ゲンチアブダルよ、みなが熱い思いを抱くと思うな

クルバンの皮がみな毛皮となると思うな

微笑みかける者たちがみな友と思うな

中身はカーフィル、外見はムスリムがなんと多いことよ

(ゲンチアブダル) 愚かな若者達

クルバン：犠牲獣

カーフィル：不信仰者



## 礼拝（サラート）第5回

### 5) 礼拝の仕方（先月号からの続き）

前回までの説明で1ルクア行ったこととなります。2ルクアの礼拝を行う時は、この後にタシャッフドを行います。

#### 15：タシャッフドを行う

この時両手は両腿のうえに置く。「アッタヒーヤート リッラーヒ、アッサラーム アライカ アイユハンナビーユ ワ ラハマトウ ッラーヒ ワ バラカートウフ、サラームン アライナー ワ アラーイバーディッラーヒ ッサーリヒーニ、アシュハド アッラー イラーハ イッラッラーハ ワ アシュハド アンナ ムハンマダン ラスールッラーヒ」と唱える。

التَّحِيَّاتُ لِلَّهِ، السَّلَامُ عَلَيْكَ أَيُّهَا النَّبِيُّ وَرَحْمَةُ اللَّهِ وَبَرَكَاتُهُ، سَلَامٌ عَلَيْنَا وَ عَلَى عِبَادِ اللَّهِ الصَّالِحِينَ، وَ أَشْهَدُ أَنْ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ وَ أَشْهَدُ أَنَّ مُحَمَّدًا رَسُولَ اللَّهِ.

3ルクアの礼拝の場合はこのあと3ルクア目に続けます。その後タシャッフドをもう一度行います。4ルクアの場合は4ルクア目のあとにもう一度タシャッフドを行います。

#### 16：サラートアランナビーとサラートイブラーヒーミーヤを唱える

タシャッフドのあと、サラートアランナビーとサラートイブラーヒーミーヤを唱える。

اللَّهُمَّ صَلِّ عَلَى مُحَمَّدٍ وَعَلَى آلِ مُحَمَّدٍ، كَمَا صَلَّيْتَ عَلَى إِبْرَاهِيمَ وَعَلَى آلِ إِبْرَاهِيمَ، إِنَّكَ حَمِيدٌ مَجِيدٌ، اللَّهُمَّ بَارِكْ عَلَى مُحَمَّدٍ وَعَلَى آلِ مُحَمَّدٍ، كَمَا بَارَكْتَ عَلَى إِبْرَاهِيمَ وَعَلَى آلِ إِبْرَاهِيمَ، إِنَّكَ حَمِيدٌ مَجِيدٌ.

「アッラーフンマ サリ アラー ムハンマディン ワ アラー アーリ ムハンマディン、カマー サライタ アラー イブラーヒーマ ワ アラー アーリ イブラーヒーマ インナカ ハミードウン マジード、アッラーフンマ バーリク アラー ムハンマディン ワ アラー アーリ ムハンマディン、カマー バーラクタ アラー イブラーヒーマ ワ アラー アーリ イブラーヒーマ、インナカ ハミードウン マジード」

#### 17：タスリーム

右を向きながら「アッサラーム アライクム ワ ラハマトウッラー」と言う。続けて左を向きながら「アッサラーム アライクム ワ ラハマトウッラー」と言う。

السَّلَامُ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَةُ اللَّهِ

これで1回の礼拝が終わりました。礼拝後にズィクル、ドウアーをおこなうことはスンナです。義務の礼拝のあとに続けて礼拝を行う時は立つ位置をかえて行うことが奨励されます。礼拝は上記に述べられた順序で行います。

次回はズィクルとドウアーの一部を紹介します。



## アブ・バクルに対する国庫からの日給

アブ・バクルは布の商売をして生計を立てていた。み使いの死後、人々は彼をカーリーファとして推挙した。その翌日、彼は布を売るために市場に行く途中ウマルに出会った。

「あなたはどこに行くのですかアブ・バクルよ！」

「市場に。」

「もしも、あなたが、まだ商売をなさっていたら、いったい誰が、カリフの義務をはたすのですか？」

「それなら私の家族をどう養ったらよいだろうか。」

「アブ・ウバイダ(公金の管理者)のところに行ってみよう。彼は国庫からあなたに定額を支給するでしょう。」

そこで二人はアブ・ウバイダのところに行った。相談の結果、彼はアブ・バクルのために支給の額を定めた。それはムハージルーン(メッカからみ使いに従って移住してきた信者)の平均給与と同額であった。ある時アブ・バクルの妻が彼に言った。

「私は甘い者が大変好きです。」

アブ・バクル 「私はそれを作る金がないよ。」

イスラームか否かにかかわらず、近代的な人間の考え方は唯物論の思想の影響を受けたものである。本書

妻 「もし、あなたがお許し下さるのなら、私どもへの毎日の支給額の中から少しづつ節約してみましよう。何日かすれば、甘い料理を作るだけの額が準備できるでしょう。」

彼は同意した。長い間かかって、わずかの金が貯えられたので、甘い料理の材料を買うためにその金を渡したところ、彼は言った。

「われわれの所要額よりもそんなに多く貰っていたと見える。」といて、その貯えを国庫に預け、彼の妻が毎日節約していた額だけ将来は彼の給料を切り下げることにした。

## 本の紹介

### やすらぎへの道 光の書簡集(リサーレイヌールコレクション)

サイド・ヌルシ(著)、The Light Inc.(株) ¥500

簡集はこれがもたらす疑いと「なぜ」で始まる全ての質問に答える総合的な書簡集である。著者はこの書簡集で信仰の基本や近代的な人間のあり方について、クルアーンの注釈を通じて説明している。アッラーの存在と唯一性、預言者の性質、復活日等のような信仰の真実の全てを合理的に説明している。著者は容易に理解される物語、比較、説明と論証によって宗教の真実と近代的な科学の調査結果の互換性を揭示し、その二つは互いに補強し合っていると証明している。

不信仰が人間にもたらす耐え難い痛みとみじめさを指摘し、この世界でも来世でも幸せになるために、まず主を認めなければならないと著者は宇宙と人間の創造に関する真の目的を指摘説明しながら証明している。



アンネ

### 「ムハンマド—イスラームの源流をたずねて」 by 小杉泰 を読んで 第2回

先月号でシーア派とスンナ派の話の最後に「懺悔する者達」と書きましたが、「悔悟する者達」の誤りでした。この場をお借りして訂正したいと思います。

アシューラーの日（ムハンマドSの時代からのモーセにちなんだ断食の日）はフサイン殉教の日としてイランなどでシーア派の人々が胸を手で打ち、鎖で鞭打ちながら町を歩く光景が見うけられますがこれは先月号のカルバラーでの悲劇を悔やんで行われています。

先月に引き続きですが、苦しむ人を助ける「アリーの子孫をカリフの座に就けたい」というのがシーア派の運動であり、ウマイヤ朝に対しても反乱を起こしては弾圧されていました。ウマイヤ朝も衰えてきた頃、「預言者の一族（アリーの子孫）をカリフ位に」というスローガンでシーア派的感情を利用しアッバース家がウマイヤ朝を打ち倒しました。ところが終わってみると結局権力を握ったのはアッバース家でした。これに幻滅したシーア派の人々は、誰をイマームとして仰ぐかと言う問題をめぐってさらに三つの派に分かれます（ここでのイマームとはアリーの血を引いた（神秘的力も持つ）シーア派信条に従う全信徒の指導者で、礼拝の先導者ではありません。） イスマーイール派、ザイド派、十二イマーム派があり、現在ではアリーの子フサイン系統の十二人をイマームと認める十二イマーム派が、全シーア派人口の8割を占め主流となっています。

ここまでシーア派のことばかりでしたので、スンナ派についても少し述べたいと思います。スンナ派は正式には「スンナとジャマア（集団）の民」といわれ、預言者の慣行（スンナ）に従い、ウンマ（イスラームの共同体）の大多数が承認するハディース（預言者の言行録）に語られている内容をもって預言者の教えと見なします。預言者の後継者選びの問題に関してもスンナ派では、「私の後継者には、こういう人を。。。というハディースが無いので、シーア派のようにアリーの子孫をイマームとすることを認めていません。逆に共同体による選出および合意によって選出された、アブーバクルやウマルなどの正統4代カリフを理想的イスラームの長として認めています。

参考：「イスラームとは何か」 p.208-239

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com>

[yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸3-10-6, 404